

日蓮大聖人御書全集

にいけごしよ

新池御書

新版  
2062  
S  
2069

新池御書

弘安 3 年 ('80) 2 月 59 歳 新池殿

弘安 3 年 ('80) 2 月 59 歳 新池殿

まっぼうる ふ われ

うれしきかな、末法流布に生まれあえる我ら。かなしきか

こんど きよう しん ひとびと にんかい しょう う

な、今度この経を信ぜざる人々。そもそも、人界に生を受

者 たれ むじよう まぬか なん

くるもの、誰か無常を免れん。さあらんにとっては、何ぞ

ごせ 勤

後世のつとめをいたさざらんや。

せけん てい かん ひと みな ぐち きよう

つらつら世間の体を観ずれば、人、皆、口にはこの経を

しん て きようがん 握 背

信じ、手には経巻をにぎるといえども、経の心にそむく

あくどう まぬか がた たと ひと みなごぞう いちぞう

あいだ、悪道を免れ難し。譬えば、人に皆五臓あり。一臓

も損そんずれば、その臟ぞうより病やまい出いで来て余きの臟よを破ぞうり、終つひに命いのち  
を失うしなうがごとし。ここをもつて伝教大師でんぎようだいしは、ほけきよう「法華經を讚ほ

むといえども、還かえつて法華の心ほつけを死ころす」等とう云々うんぬん。文もんの心ころは、

法華經ほけきようを持ち讀たまみ奉より讚たてまつむれども、法華の心ほに背ほつけきぬれ

ば、還かえつて釈尊しゃくそん・十方じつぽうの諸しよ仏ぶつを殺ころすに成なりぬと申もうす意こころな

り。終つひに世間せけんの悪業あくごう・衆罪しゆざいは須弥しゆみのごとくなれども、この經きよう

にあい奉たてまつりぬれば、諸罪しよざいは霜露そうろうのごとくに法華經ほけきようの日輪にちりんに

値あい奉たてまつつて消きゆべし。しかれども、この經きようの十四じゆう謗法しほうの中なか

にいちも二にもおかしぬれば、その罪つみ消きえがたし。所以ゆえんはいかん。

に一も二もおかしぬれば、その罪消えがたし。所以はいかん。

いちだいさんぜんかい

うじよう ころ

いちぶつ

一大三千界のあらゆる有情を殺したりとも、いかでか一仏

ころ つみ およ

ほっけ ころろ そむ

じつぼう ほとけ

を殺す罪に及ばんや。法華の心に背きぬれば、十方の仏の

いのち うしな つみ

捷 そむ

ほうぼう もの もう

命を失う罪なり。このおきてに背くを謗法の者とは申す

なり。

じごく 恐

ほのお

いえ

がきかな

地獄おそるべし、炎をもつて家とす。餓鬼悲しむべし、

けかち 飢

こく

しゆら どうじよう

ちくしよう ざんがい

飢渴にうえて子を食らう。修羅は鬪諍なり。畜生は残害と

たが ころ

合 ぐれんじごく もう

紅

蓮

て互いに殺しあう。紅蓮地獄と申すは、くれないのはちすと

誦

ゆえ

あま

かん

詰

屈

よむ。その故は、余りに寒につめられてごごむあいだ、

背 中 割

にく い

くれない

はちす

に

せなかわれて肉の出でたるが、紅の蓮に似たるなり。い

だいぐれん

あくしよ

おうい

しょうぐん

もの

わんや大紅蓮をや。かかる悪所にゆけば、王位・將軍も物な

ごくそつ

かしゃく

値

すがた

さる

回

こと

らず。獄卒の呵責にあえる姿は、猿をまわすに異ならず。

とき

みようもんみょうり

がまんへんしゅうあ

この時は、いかでか名聞名利・我慢偏執有るべきや。

おぼ

ほけきよう

知

そう

ふしぎ

こころざし

思しめすべし。法華經をしれる僧を不思議の志にて

いちど

くよう

あくどう

い

一度も供養しなば、悪道に行くべからず。いかにいわんや、

じゅうどにじゅうど

ないしごねんじゅうねん

いちごしよう

あいだくよう

くどく

十度二十度、乃至五年十年・一期生の間供養せる功德を

ほとけ

ちえ

し

きよう

ぎようじゃ

いちど

ば、仏の智慧にても知りがたし。この經の行者を一度

くよう

くどく

しゃかぶつ

ただ

はちじゅうおくこう

あいだ

むりよう

供養する功德は、釈迦仏を直ちに八十億劫が間、無量の

たから

つ

くよう

くどう

ひやくせんまんおくすぐ

ほとけ

宝を尽くして供養せる功德に百千万億勝れたりと仏は

と たま そろろう きよう 値 たてまつ よろこ み

説かせ給いて候。この経にあい奉りぬれば、悦び身に

あま そろ まなこ なみだう しやくそん ごおんほう つ

余り、左右の眼に涙浮かびて、釈尊の御恩報じ尽くしが

やま たびたび ごくよう ほげきよう

たし。かようにこの山まで度々の御供養は、法華経ならび

しゃかそん ごおん ほう たも な そうろう 励

に釈迦尊の御恩を報じ給うに成るべく候。いよいよはげ

たも おこた

ませ給うべし。懈ることなかれ。

みなひと きよう しん はじ ととき しんじん あ み そうろう

皆人のこの経を信じ始むる時は信心有るよう見え候

なか しんじん 弱 そう くぎよう くよう

が、中ほどは信心もよわく、僧をも恭敬せず、供養をもなさ

じまん あっけん おそ おそ はじ

ず、自慢して悪見をなす。これ恐るべし、恐るべし。始めよ

お しんじん お こうかい

り終わるまで、いよいよ信心をいたすべし。さなくして、後悔

やあらんずらん。譬えは、鎌倉より京へは十二日の道なり。

じゆういちにちあま

あゆ

運

いまいちにち

な

あゆ

それを十一日余り歩みをはこびて、今日に成つて歩みを

差置

なん

みやこ

つき

なが

そうろう

なん

さしおきては、何として都の月をば詠め候べき。何とし

きよう

こころ

知

そう

ちか

ほう

どうり

てもこの経の心をしれる僧に近づき、いよいよ法の道理を

ちようもん

しんじん

あゆ

はこ

聴聞して、信心の歩みを運ぶべし。

す

かた

し

われ

いのち

ああ、過ぎにし方のほどなきをもつて知んぬ。我らが命、

いまいく

はる

あした

はな

詠

とき

伴

今幾ほどもなきことを。春の朝に花をながめし時ともない

あそ

ひと

はな

むじよう

あらし

ち

果

な

のこ

遊びし人は、花とともに無常の嵐に散りはてて、名のみ残り

ひと

亡

はな

ち

来

しゆん

ひら

てその人はなし。花は散りぬといえども、またこん春も発く

べし。されども消えにし人は、またいかならん世にか来るべ

あき

く

つき

なが

ときたわむ

睦

ひと

つき

き。秋の暮れに月を詠めし時戯れむつびし人も、月とともに

うい

くも

い

のち

おもかげ

み

添

もの言

に有為の雲に入つて後、面影ばかり身にそいて物いうことな

つき

せいざん

い

来

しゆう

なが

し。月は西山に入るといえども、またこん秋も詠むべし。

隠

ひと

いま

す

しかれども、かくれし人は今いずくにか住みぬらん、おぼつ

かなし。

むじよう

とら

咆

こえ

みみ

近

き

おどろ

無常の虎のなく音は耳にちかづくといえども、聞いて驚

としよ

ひつじ

いまいくか

むじよう

みち

あゆ

くことなし。屠所の羊の今幾日か無常の道を歩まん。

せつせん

かんくちよう

かんく

責

よあ

す

作

雪山の寒苦鳥は、寒苦にせめられて、夜明けなば栖つくら

んと鳴くといえども、日出でぬれば、朝日のあたたかなるに

ねむ わす す 暖

眠り、忘れて、また栖をつくらずして一生虚しく鳴くこと

得 いつさいしゅじょう じごく お ほのお

をう。一切衆生もまたまたかくのごとし。地獄に墮ちて炎

咽 とき ねが こんどにんげん う しょじ さしお

にむせぶ時は、願わくは今度人間に生まれて、諸事を闇い

さんぼう くよう ごせぼだい 助 ねが

て三宝を供養し、後世菩提をたすからんと願えども、たまた

にんげん きた とき みようもんみょうり かぜ 激 ぶつどうしゅぎよう

ま人間に来る時は、名聞名利の風はげしく、仏道修行の

ともしび き むやく さいほう 尽 惜

灯は消えやすし。無益のことには財宝をつくすにおしから

ぶつほうそつ 少 くよう 物 憂 おも

ず、仏法僧にすこしの供養をなすにはこれをものうく思うこ

と、これただごとにあらず。地獄の使いのきおうものなり。

じごく つか 競

すんぜんしやくま もう

寸善尺魔と申すはこれなり。

うえ くに ほうぼう ど しゅご ぜんじん ほうみ 飢

その上、この国は謗法の土なれば、守護の善神は法味にう

やしろ 捨 てん のぼ たま やしろ あつきい 替

えて社をすて天に上り給えば、社には悪鬼入りかわりて

おお ひと みちび ぶつだ け 止 じゃつこうど かえ たま

多くの人を導く。仏陀は化をやめて寂光土へ帰り給えば、

どうとう じしや まえん すみか な くに つい たみ

堂塔・寺社はいたずらに魔縁の栖と成りぬ。国の費え、民

なげ 薨 なら わたくし ことば

の歎きにて、いらかを並べたるばかりなり。これ私の言

きようもん なら

にあらず、経文にこれあり、習うべし。

しよぶつ しよじん ほうぼう くよう まった う と たま

諸仏も諸神も、謗法の供養をば全く請け取り給わず。い

にんげん 受 かつがのだいみようじん

わんや、人間としてこれをうくべきや。春日大明神の

ごたくせん い はん あかがね ほのお じき こころけが

御託宣に云わく「飯に銅の炎をば食すとも、心穢れた

ひと もの 受 ぎ あかがね ほむら じき こころけが

る人の物をうけじ。座に銅の焰には坐すとも、心汚れ

ひと いえ 至 くさ ろう かや のき

たる人の家にはいたらじ。草の廊、萱の軒にはいたるべし」

い せんち 注連 ひ ふしん ところ

と云えり。「たとい、千日のしめを引くとも、不信の所に

いた じゅうぶくじんこう いえ うしん ところ いた

は至らじ。重服深厚の家なりとも、有信の所には至るべ

うんぬん ぜんじん ほうぼう くに 歎

し」云々。かくのごとく、善神はこの謗法の国をばなげき

てん のぼ たま そうろう こころ 汚 もう ほげきよう

て天に上らせ給いて候。心けがれたると申すは、法華経

たも ひと きよう ご かん み

を持たざる人のことなり。この経の五の巻に見えたり。

ほうぼう くよう あかがね ほむら 仰 かみ

謗法の供養をば銅の焰とこそおおせられたれ。神だにも

かくのごとし。いわんや、我ら凡夫として、ほむらをば食す

われ ほんぷ 炎 じき

べしや。人の子として、我が親を殺したらんもの我に物を

得 ひと こ わ おや ころ 者 われ もの ちしや しようにん むけん

えさせんに、これを取るべきや。いかなる智者・聖人も無間

じごく のが ちか よどうさい

地獄を遁るべからず。またそれにも近づくべからず。与同罪、

おそ おそ

恐るべし、恐るべし。

しやくそん いっさい しょうぶつ いっさい しょうじん にんてんだいえ いっさいしゆじよう

釈尊は、一切の諸仏・一切の諸神・人天大会・一切衆生

ちち しゆ し しょうそん ころ

の父なり主なり師なり。この釈尊を殺したらんに、いかで

しよてんぜんじんとう おぼ いま くに いっさい

か諸天善神等、うれしく思しめすべき。今この国の一切の

しよにん みな しやくそん おんかたき ざいけ ぞくなん ぞくによとう

諸人は皆、釈尊の御敵なり。在家の俗男・俗女等よりも、

邪智心の法師ばらは、殊の外の御敵なり。智慧ちえにおいても、

しょうち じやち ちえ じやぎ したが

正智あり、邪智あり。智慧ありとも、その邪義には随うべ

きそう じやち ちえ じやぎ したが

からず。貴僧・高僧には依るべからず。賤いやしき者ものなりとも、

きよう きそう こうそう よ いや もの

この経の謂れを知りたらんものをば、生身の如来のごとく

らいはい くよう きようもん

に礼拝・供養すべし。これ経文なり。

でんぎようだいし むち はかい なんによとう きよう

されば、伝教大師は無智・破戒の男女等も、この経を

しん もの しょうじようひやくくごじっかい そう かみ ざせき す

信ぜん者は、小乗二百五十戒の僧の上の座席に居えよ、

まつぎ だいじよう きよう そう

末坐にすべからず。いわんや、大乘この経の僧をや」と

いま しょうじん によらい 見

あそばされたり。今、生身の如来のごとくにみえたる

ごくらくじ

りようかんぼう

きよう

しん

なんによ

ざせき

極楽寺の良観房よりも、この経を信じたる男女は座席を

たかす

そうら

かにひやくごじつかい

りようかんぼう

にちれん

高く居えよとこそ候え。彼の二百五十戒の良観房も、日蓮

あ

はら立

まなこ

怒

に会いぬれば、腹をたて、眼をいからす。これただごとに

ちしや

み

ま

い

替

たと

ほんしよう

はあらず。智者の身に魔の入りかわればなり。譬えば、本性

善

ひと

さけ

よ

悪

こころしゅつたい

ひと

よき人なれども、酒に酔いぬればあしき心出来し、人のた

悪

めにあしきがごとし。

ほとけ

ほつけいぜん

かしよう

しやりほつ

もくれんとう

くよう

仏は、法華以前の迦葉・舍利弗・目連等をば、「これを供養

もの

さんあくどう

お

かれ

こころ

いぬ

やかん

こころ

せん者は三悪道に墮つべし。彼らが心は犬・野干の心に

おと

と

たま

そうろう

か

しだいしようもんとう

は劣れり」と説き給いて候なり。彼の四大声聞等は、

にひやくごじつつかい たも

こんごう

さんぜん いぎぐそく

二百五十戒を持つことは金剛のごとし、三千の威儀具足す

じゅうごや つき

ほけきょう たも

ることは十五夜の月のごとくなりしかども、法華経を持た

とき

おお

ざる時は、かくのごとく仰せられたり。いかにいわんや、

おと こんじ もの

けんちようじ えんがくじ そう

それに劣れる今時の者どもをや。建長寺・円覚寺の僧ども

さほう かいもん やぶ

おおやま くず

いぎ

の作法、戒文を破ることは大山の頰れたるがごとく、威儀の

ほうらつ

さる に

くよう ごせ たす

放埒なることは猿に似たり。これを供養して後世を助から

おも

んと思うは、はかなし、はかなし。

しゆご ぜんじん

くに す

うたが

むかし

守護の善神、この国を捨つること疑いあることなし。昔

しやくそん みまえ

しよてんぜんじん ぼさつ しょうもん いくどうおん ちか

釈尊の御前にして、諸天善神・菩薩・声聞、異口同音に誓

立

たま

ほけきよう

おんかたき

くに

いをたてさせ給いて、「もし法華經の御敵の国あらば、あ

ろくがつ

しも

あられ

な

くに

ききん

もう

るいは六月に霜・霰と成つて国を飢饉せさせん」と申し、

しょうちゆう

な

ごこく

食

うしな

もう

あるいは「小虫と成つて五穀をはみ失わん」と申し、あ

かんぼつ

おおみず

な

でんえん

流

るいは「早魃をなさん」、あるいは「大水と成つて田園をなが

もう

おおかせ

な

にんみん

ふ

ころ

さん」と申し、あるいは「大風と成つて人民を吹き殺さん」

もう

あつき

な

悩

めんめん

もう

と申し、あるいは「悪鬼と成つてなやまさん」と面々に申さ

たま

いま

はちまんだいぼさつ

ざ

せ給いき。今の八幡大菩薩もその座におわせしなり。いか

りようぜん

きしよう

やぶ

恐

たま

きしよう

やぶ

でか靈山の起請の破るるをおそれ給わざらん。起請を破ら

たま

むけんじごく

うたが

おそ

たも

せ給わば、無間地獄は疑いなきものなり。恐れ給うべし、

おそ たも

恐れ給うべし。

いま

まさ

ほとけ

おんつか

しゅつせ

きよう

ひろ

今までは、正しく仏の御使い出世してこの経を弘めず。

こくしゆ

おんかたき

たま

国主もあながちに御敵にはならせ給わず。ただいずれも

たつと

おも

いま

それがし

ほとけ

おんつか

貴しとのみ思うばかりなり。今、某、仏の御使いとし

きよう

ひろ

かみいちにん

しもばんみん

いた

てこの経を弘むるによつて、上一人より下万民に至るまで、

みなほうぼう

な

お

いま

くに

もの

ほけきよう

皆謗法と成り畢わんぬ。今までは、「この国の者ども、法華経

おんかたき

いっし

生

憎

す

の御敵にはなさじ」と、一子のあやにくのごとく捨てかね

りようぜん

きしよう

恐

やしろ

や

はら

ておわせども、霊山の起請のおそろしさに、社を焼き払つ

てん

のぼ

たま

しんみよう

惜

て天に上らせ給いぬ。さはあれども、身命をおしまぬ

ほけきよう ぎようじや

こうべ

す

てんしょうだいじん

法華經の行者あれば、その頭には住むべし。天照太神・

はちまんだいぼさつ

てん

のぼ

たま

よ

しよじん

やしろ

八幡大菩薩、天に上らせ給わば、その余の諸神いかでか社

とど

す

おぼ

りようぜん

に留まるべき。たとい捨てじと思しめすとも、靈山の

約 東

それがしかしやく

たてまつ

いちにち

やくそくのままに 某呵責し奉らば、一日もやわかおわ

たと

ぬすびと

そうろう

し

とき

すべき。譬えば、盗人の候に、知れぬ時はかしこやここ

す そうら

よ あんないし

もの

ぬすびと

に住み候えども、能く案内知りたる者の「これこそ盗人よ」

罵

響

思

ほか

すみか

さ

とののしりどめけば、おもわぬ外に栖を去るがごとく、

それがし

障

やしろ

す

たも

くに

某にささえられて社をば捨て給う。しかるに、この国、

おも

ほか

あつきじん

す

あわ

あわ

思いの外に悪鬼神の住みかとなれり。哀れなり、哀れなり。

いちだいししやうぎやう ひろ ひととお

また一代聖教を弘むる人多くおわせども、これ程の

だいじ ほうもん でんぎやう てんだい

大事の法門をば、伝教・天台もいまだ仰せられず。それも

どうり まつぼう はじ ごひやくねん じやうぎやうぼさつ しゆつせ

道理なり。末法の始めの五百年に上行菩薩の出世あつて

ひろ たも ほうもん ゆえ あいかま

弘め給うべき法門なるが故なり。相構えて、いかにしても

たび きやう よ しん みやうじゆう とき せんぶつ むか あず

この度この経を能く信じて、命終の時、千仏の迎いに預

りやうぜんじやうど はし じじゆほうらく しんじんよわ

かり、靈山浄土に走りまいり、自受法樂すべし。信心弱く

じやうぶつ 延 とき それがし 恨 たも たと

して成仏ののびん時、某をうらみさせ給うな。譬えば、

びやうじや ろうやく あた どく この 食 やまい

病者に良薬を与うるに、毒を好んでくいぬれば、その病愈

とき わ 失 おも かえ くすし うら

えがたき時、我がとがとは思わず、還つて医師を恨むるがご

とくなるべし。

きよう

しんじん

もう

すこ

わたくし

きようもん

この経の信心と申すは、少しも私なく、経文のごとく

ひと

ことば

もち

ほっけいちぶ

そむ

ほとけ

に、人の言を用いず、法華一部に背くことなければ、仏に

な

そうろう

ほとけ

な

そうろう

べつ

よう

そうら

成り候ぞ。仏に成り候ことは別の様は候わず。

なんみようほうれんげきよう

たじ

とな

もう

そうら

てんねん

南無妙法蓮華経と他事なく唱え申して候えば、天然と

さんじゆうにそうはちじっしゆこう

そな

われ

ひと

こと

三十二相八十種好を備うるなり。「我がごとく等しくして異

もう

しやくそんほど

ほとけ

易

々

な

なることなし」と申して、釈尊程の仏にやすやすと成り

そうろう

候なり。

たと

とり

たまご

はじ

みず

みず

なか

たれ

譬えば、鳥の卵は始めは水なり。その水の中より、誰か

なすともなければども、**鶯**よ目よと齧り出で来て、**虚空**にか

くちばし め かざ い き こくう 翔  
われ むみよう たまご 浅 み

けるがごとし。我らも無明の卵にしてあさましき身なれど

なんみようほうれんげきよう とな はは 温

も、南無妙法蓮華經の唱えの母にあたたためられまいらせて、

さんじゆうにそう くちばしい はちじっしゆこう よろいげ お 揃

三十二相の鶯出でて八十種好の鎧毛生いそろいて、実相

しんによ こくう 翔 きよう い いっさい

真如の虚空にかけるべし。ここをもつて經に云わく「一切

しゆじよう むみよう たまご しよ ちえ ぐち ぶつも とり

衆生は無明の卵に処して、智慧の口ばしなし。仏母の鳥は

ぶんだん どうご ふるす かえ むみよう たまご 叩 わ いっさい

分段・同居の古栖に返つて、無明の卵をたたき破つて、一切

しゆじよう とり 巢 立 ほっししようしんによ おおぞら 飛 と

衆生の鳥をすだてて、法性真如の大虚にとばしむ」と説け

しゆい

り〈取意〉。

うげむしん

ほうもん

さと

しんじん無

もの

じようぶつ

有解無信とて、法門をば解つて信心なき者は、さらに成仏

うしんむげ

げ無

しんじん有

すべからず。有信無解とて、解はなくとも信心あるものは、

じようぶつ

みな

きよう

こころ

わたくし

ことば

成仏すべし。皆この経の意なり。私の言にはあらず。

にまき

しん

い

え

おの

ちぶん

されば、二の巻には「信をもつて入ることを得たり。己が智分

ちえだいいち

しやりほつ

きよう

う

たも

にあらず」とて、智慧第一の舍利弗も、ただこの経を受け持

しんじんごうじよう

ほとけ

成

おの

ちえ

ほとけ

ち信心強盛にして仏になれり、己が智慧にて仏にならず

とたま

しやりほつ

ちえ

ほとけ

と説き給えり。舍利弗だにも智慧にては仏にならず。いわ

われ

しゆじよう

ししようぶん

ほうもん

こころえ

しんじん

んや、我ら衆生、少分の法門を心得たりとも、信心なくば

ほとけ

覚

束

仏にならんことおぼつかなし。

まつだい しゅじょう ほうもん しょうぶん 心 得 そう 悔 ほう

末代の衆生は法門を少分こころえ、僧をあなずり、法を

忽 あくどう 墮 と たま ほう 心

いるかせにして悪道におつべしと説き給えり。法をこころ

得 証 そう うやま ほう 崇 ほとけ くよう

えたるしるしには、僧を敬い法をあがめ仏を供養すべし。

いま ほとけ げご ちしき ほとけ うやま

今は仏ましまさず。解悟の智識を仏と敬うべし。いかで

とくぶん ごせ ねが もの みようりみようもん す

か徳分なからんや。後世を願わん者は、名利名聞を捨てて、

い や もの ほけきよう と そう しょうじん によらい

いかに賤しき者なりとも法華経を説かん僧を生身の如来の

うやま まさ きようもん

ごとくに敬うべし。これ正しく経文なり。

こんじ ぜんしゅう だいだん じん ぎ れい ち しん ごじょう そむ

今時の禅宗は、大段、仁・義・礼・智・信の五常に背け

う ち こうとく 畏 お うやま おきな あい

り。有智の高徳をおそれ、老いたるを敬い、幼きを愛す

ないげてん ほう

るは内外典の法なり。しかるを、彼の僧家の者を見れば、

きのうきよう

でんぷやじん

こくびやく し

もの

褐

昨日今日まで田夫野人にして黒白を知らざる者も、かちん

じきとつ

き

打 まん

てんだい

しんごん

うち

の直綴をだにも着つれば、うち慢じて、天台・真言の有智・

こうとく

ひと

悔

らい

かみ

お

おも

高德の人をあなずり、礼をもせず、その上に居らんとする

ぼうじやくぶじん

ちくしよう

おと

なり。これ傍若無人にして畜生に劣れり。ここをもつて

でんぎようだいし

おんしやく

い

せんだつさいぎよ

志

りんう

伝教大師の御釈に云わく「川瀬祭魚のこころざし、林鳥

ふそ

しよく

つう

きゆうこうさんし

れい

こうがんつら

みだ

こうよう

父祖の食を通ず。鳩鴿三枝の礼あり、行雁連を乱らず、羔羊

うずくま

ちち

の

いや

ちくしよう

れい

し

踞って乳を飲む。賤しき畜生すら礼を知ること、かくの

なん

じんりん

れい

ごとし。何ぞ人倫においてその礼なからんや」とあそばされ

たりしゆい〔取意〕。彼らかれが法ほうに迷まようこと、道理どうりなり。人倫じんりんにして

だにも知らしず。これ天魔てんま破は旬じゆんのふるまい振舞にあらずや。

これらこゝろの法門ほうもんを能よく能よく明あきらめて、一部いちぶ八卷はつかん二十八品にじゅうはつぽんを

頭こゝろにいた頂たおこただおこなき、懈たまらず行たい給たまえ。また某それがしを恋こいしくおわ

せん時ときは、日々ひびに日ひを拜おがませ給たまえ。某それがしは日ひに一度いちど、天てんの日ひ

に影かげをう映つす者ものにて候そうろう。この僧そうによげませちしきまいたのらせて、

聴聞ちやうもんあるべし。この僧そうを解悟げごの智識ちしきと憑たのみ給たまいて、つねに

法門ほうもん御おんた尋ずね候そうろうべし。聞きかずんば、いかでか迷闇めいあんの雲くもを払はら

わん。足あしなくして、いかでか千里せんりの道みちを行いかんや。返かえす返がえす、

しよ

読

ごちようもん

ことごとめん

つ

この書をつねによませて御聴聞あるべし。事々面の次いで

ご そろろ

いさい

もう

の

そろろ

を期し候あいだ、委細には申し述べず候。あなかしこ、

あなかしこ。

こうあんさんねんにかつ

弘安三年二月

日

にちれん

日蓮

かおう

花押

にいけどの

新池殿